

2023年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

立教大学ジェンダーフォーラムは、本学女子学生寮であったミッチェル館の理念を引き継ぎ、ジェンダーについての教育・研究活動の拠点として1998年4月に誕生しました。本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とします。

(B) 活動・研究助成金	
対象: 学部学生・大学院生(個人・団体)	面接日時: 2023年5月中を予定。個々の面接時間はあらかじめ連絡する。
支給額: 総額20万円	面接会場: ZOOM ミーティングにて実施予定
採用品数: 1~2件程度	備考: 採用者(団体)は活動・研究の中間報告を10月末に提出の上、最終的な報告書または論文を翌年1月中旬に提出すること。提出された活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。
選考方法: 書類審査・面接	
提出書類: ①活動・研究助成金願書* ②奨学金使途を含む活動・研究計画書(A4用紙3枚程度書式自由)	

書類提出期間: 2023年4月1日(土) ~ 2023年4月30日(日) まで

書類提出先: ジェンダーフォーラム (gender@rikkyo.ac.jp) に添付ファイルにて提出

採用発表: 5月22日(月) 学生課奨学金掲示板(池袋/新座)、10号館掲示板、立教時間、フォーラムHPに掲載予定

奨学金支給方法: 6月下旬に開催予定の授与式にて現金支給

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(A)・(B)の申込書(願書)の利用目的】

標記の申込書(願書)で取得した個人情報は、奨学金採用者(団体)の選考および発表のために利用する。採用者(団体)の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。

以上に同意した上で、申込書(願書)を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「立教大学プライバシーポリシー:個人情報取扱に関する基本方針」(<http://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/>)を参照すること。

* (A) ジェンダーフォーラム論文賞の募集は10月に行います。

詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。

ジェンダーフォーラム事務局(池袋キャンパス6号館1階) Tel: 03-3985-2307 E-mail: gender@rikkyo.ac.jp

* 申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生課窓口(池袋/新座)、独立研究科事務室窓口にあります。ホームページ上からもダウンロードできます。(<http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>)

立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」にとらわれず、性差やセクシュアリティ(性自認・性的指向など)についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー(gender)とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女/男らしさ」「女/男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館(1998年閉館)の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒーアワーなどを開催しています。

開室日: 毎週月曜日~金曜日 ※秋学期は金曜閉室

開室時間: 10:00~16:00

※新型コロナウイルス対策のため、一時的に開室日時を変更する可能性があります。詳しくはホームページをご確認ください。

場所: 立教大学池袋キャンパス6号館1階

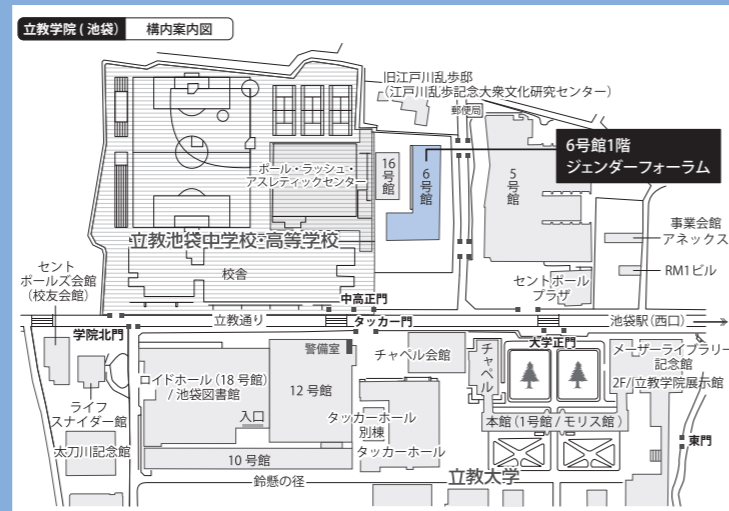
TEL: 03-3985-2307

E-mail: gender@rikkyo.ac.jp

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>



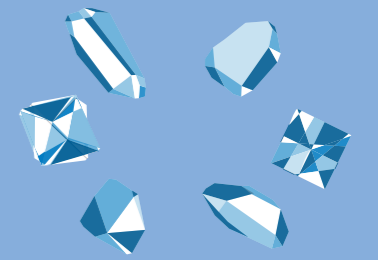
6号館1階奥から入口付近のスペースに移転しました!



GEM

Vol.48 2023.03.31

Rikkyo Gender Forum News Letter



Gender Forum
Rikkyo University



Gemとは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館(1998年閉館)の“M”にちなんだものでした(Gender Encountering in Mitchell)。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味するGender Equality in the Makingとし、ニュースレター、メーリングリストの名前として使用しています。

2022年度映画上映会(2022年11月13日(日))

「映画『タンズ アンタイド』上映会&トークセッション」

登壇者: Political Feelings Collective、Normal Screen

ジェンダーフォーラム主催の本イベントは、前半部でマーロン・リグス監督の『タンズ アンタイド』(原題 *Tongues Untied*, 1989年)を上映し、後半部では本作に日本語字幕を付した翻訳出版集団のポリティカル・フィーリングス・コレクティブ、および上映団体のノーマルスクリーンが解題を提供するという二本立てだった。

アフリカ系アメリカ人のゲイ男性であるリグス監督は、合衆国におけるマイノリティへの抑圧を幾重にも経験した当事者でもあり、個人・集団としての経験や自己認識、歴史を映像化してきた映像作家である。その監督の代表作(タイトルは「ほどかれた舌たち」の意)と聞けば、直截的なドキュメンタリーをつい想像してしまうが、その予想は、“Brother to brother”というフレーズがラップのように反復され次第に重なっていく冒頭のパフォーマンスから良い意味で裏切られる。実験的ドキュメンタリーとも称される本作では、詩のパフォーマンス、体験談と語り、スキット、ドキュメンタリー映像、多彩な音楽が組み合わさり、数分程度の場面が断片的に提示される。その中で観客は、非言語的な情報の波に飲み込まれ、首尾一貫した語りを見出すことがむずかしいままに情動の渦に圧倒される。

トークセッションでは、今回の上映に至るまでの経緯、本作の受容、1980年代エイズ禍の社会背景、リグス監督が本作の創作に至った経緯や文化的系譜、監督のほか本作に密接な関わりのある二人の黒人ゲイ男性の詩人・作家——エセックス・ヘンプヒルとジョセフ・ビーム——の伝記的背景、そして黒人フェミニスト作家オードリー・ロードが三人に与えた影響の重要性、などが仔細に解説された。この解題は難解な本作を理解する上で大きな助けとなった。

私が特に興味を惹かれたのは、一つには、リグスが『タンズ アンタイド』の革新的な形式の着想に至った経緯である。ゲイ・レスビアン映画祭などに参加しても自らの心を打つ作品には出会えなかったリグスは、80年代のNYで黒人ゲイ男性の作家集団による詩のワークショップに魅せられたという。詩的な表現形式を集団的にサポートしあう様子を目の当たりにし、黒人ゲイ男性たちの詩と声を映像にしようというアイデアに至ったというのだ。

加えて、上述の黒人フェミニスト作家ロードのエッセイ「アイ・トゥ・アイ」がリグスらに靈感を与えたという事実も見逃せない。司会の新田啓子先生もコメントしたように、合衆国に生きる黒人女性がなぜ強い怒りをお互いに向け合ってしまうのかを問うブラック・フェミニズムから、リグスやヘンプヒルやビームらの黒人ゲイ男性の芸術が刺激を受けてきたという文脈が確かにあるのだ。社会的連帯のありうるかたちについて、そして個々の経験を分節化し媒介しうる新たな芸術の形式やジャンルがいかに生じるのかについて、思考を強く促されるイベントだった。

木原健次(白百合女子大学文学部英語英文学科准教授)

第 87 回ジェンダーセッション (2022 年 11 月 16 日 (水))

「性的マイノリティ 『支援』・『理解』の一步先へ： 日本のクィアペダゴジーの歴史から考える」

登壇者：堀川修平氏 (埼玉大学、立教大学ほか非常勤講師。一般社団法人“人間と性”教育研究協議会幹事)

学ぶことによって、自分が誰かの“足を踏んでいる”かもしれないと気づかされる。その学びや気づきは、人のあり方・ありたい姿を抑圧されることによって抱えていた違和感や苦痛を、受けとめて、社会構造の問題を認識する力、そして現状改善のために立ち上がる勇気へと変換してくれる。講演をしてくださった堀川修平先生からいただいた、私なりの視野の広がりである。

ジェンダーフォーラムが主催する第87回ジェンダーセッションは、11月16日に、対面とオンラインのハイブリッド型で開催された。2022年現在、「性的マイノリティ」への認知や人権保障が進みつつあり、同月1日には東京都でパートナーシップ宣誓制度の運用が始まった。しかし、属性による排除のなくならない現状や、「レインボー消費」という課題も指摘されている。

【クィアペダゴジー】という、相手を踏みつけている自分の足の存在や、その足をどかすことの重要性を認識するための実践がある。30年前の日本において、「異性愛=フツー」という思い込み／思い込ませるような、既存のジェンダー・セクシュアリティ観の暴力性を問う教育実践をされていた先生方の取り組みがあった。誰かに生きづらさを感じさせる構造に問題意識を持ち、働きかけた人びとによって、社会は変えられてきた。私たちはバトンを受け取って、さらによりよい社会へと変えていく必要がある。

その力を育てる方法の一つが、教育であると堀川先生は強調す

る。教育とは、一人ひとりの主体的な生を促すこと、社会を変えていけるように発達を促すことをいう。また、教育現場において、【生きづらさを抱える子どもたちへの個別対応は必須である。同時に、その生きづらさを創出してしまっている、ジェンダー・セクシュアリティ差別の構造自体を問い直すべき】と語られた。

例えば、「同性を好きになる人もいます」「かれらを理解・支援しましょう」という態勢では、異性愛中心主義の権力構造を維持し、「マイノリティ」として他者化されてしまう誰かがいる。性のあり方 (身体的性別、性自認、性的指向、性表現) を含め諸属性に、アイデンティティを、一人ひとりがそれぞれ持っている。誰もが、多様な要素を掛け合わせた唯一無二の自分自身なのである。そうした自他の多様性を尊重するために、自分ごととして学び合い、考え合うことは、価値観や行動をアップデートできる、ともに生きる人びとと支え合える、すべての人の人権が守られた社会を作っていける——広大な可能性に満ちている。みんなの生きやすさのために自分に何ができるか、学び、考える機会をくださった、堀川先生、そして関係者のみなさまに感謝したい。

中野恵梨子 (本学文学部史学科3年)

第 88 回ジェンダーセッション (2023 年 1 月 21 日 (土))

「フェミニズム／フェミニティと「成熟」 ——運動と理論をつなぐために」

登壇者：西村紗知氏 (批評家)、住本麻子氏 (ライター)

ここ最近、「成熟」概念がリバイバルしているという。西村紗知と住本麻子によるこの度のジェンダーセッションは、江藤淳の文学評論 (『成熟と喪失』) において50年以上も前に主題化されたこの「成熟」概念を展開することで、理論と運動を結合することをひとつの狙いとしている。

なぜ、そのような作業が必要とされるか。ひとつには「運動」というものが一般に、理論的な視座を欠くために長期間維持されず短命に終わってしまうことがある、という事情があるのだという。このようにして投げかけられた問題などもふまえながら、従来においても元の評論という文脈から一人歩きし、消費社会論やオタク論として読まれた「成熟」概念は、この度のセッションにおいてフェミニズム／フェミニティの視点から戦略的に読み替えられる。

私のような「門外漢」からすれば、「流行」となっているからといって、この「成熟」という概念になぜこだわる必要があるのかは、当初、ちょっとした疑問であった。すなわちこの見るからに座りの悪い概念でなく、その都度の運動に適合的な、何かよりふさわしい概念がありうるのではないか。

だが対話を聞くなかで、このどこか使い勝手の悪い概念の修繕と変容こそがひとつのポイントでもあるのだ、とも思えた。個別の運動に親和的な概念を場当たりに利用しても、そのアクチュアリティはまさにその個別性ゆえに、時間の経過とともに失われてし

まうかもしれない。反対に、むしろ一見運動にとって異質な他なるものを積極的に改修することによって、これまで結びつかなかった諸々の運動体は結びつくようになる (少なくともその可能性が生じる)。言い方を変えれば、多種多様な「成熟」概念を結びつけることによってこそ、今度は様々な運動の方を結びつけるような「成熟」概念を編み上げることができるのかもしれない。

理論というものは一般に「作り事」に過ぎず、それ自体はとるに足らないものである。しかし、その虚構でしかない理論というものが現実に展開する運動の一部として、その現実を書き換える差し手となるかは、この理論というものをいかに飼いならすかという点にかかっている。そんなことを考えさせられた。

吉川侑輝 (本学社会学部助教)

2023年度コラボレーション科目の紹介

2023年度のジェンダーフォーラムは、コラボレーション科目「グローバル資本主義とジェンダー」を開講します。授業内では、いわゆるグローバル・サウスの国々の経済開発とジェンダー、女性たちとその経験を取り上げます。これらの国々の女性たちは、新自由主義と市場経済拡大の最前線に立たされてきました。これに対しフェミニストたちは、輸出向製造業・農業、国家による人口政策、移住労働などを分析し、増大する女性の負担と多重役割、女性の自律性と地位の向上可能性について研究に取り組んできました。

本授業は太田麻希子 (マニラのグローバル化と女性労働)、大野聖良 (国際移住と人身売買) の二名の担当教員に加え、アジア・環太平洋地域における豊かな研究・調査の経験を持つゲスト・スピーカーによって進められます。特に全14回のうち4~11回はインドネシア、シンガポール、サモア、インドといった海外フィールドを持つ研究者4名を招聘し、自身の研究と活動を踏まえた話題提供をもらった上で、担当教員を交えて議論を行ないます。また、全14回の最初と最後の各3回は、本授業の理論的視座の提供と議論、4~11回のゲスト回を踏まえた理論的考察とまとめを行なう予定です。

授業内では、社会学や経済学におけるグローバル資本主義のフェミニスト分析の視座に加え、植民地時代を経ての各国家の成り立ちや社会・経済・文化の基礎知識、ジェンダーに関わる重要現象、近年の新興国化とパンデミックの影響について講義を行ない

ます。各地域のコンテキストを踏まえたジェンダー課題・事象、フェミニスト社会・経済理論の流れを学ぶことで、ジェンダーの視点からの他者理解を促すとともに、日本や皆さんの周囲のジェンダー課題についてより大きな文脈で省察するための視座を提供したいと考えています。

多くの皆さんの受講をお待ちしております。

太田麻希子 (ジェンダーフォーラム所長、本学社会学部准教授)